

コ

ミュニティにおける

ソ

ーシャルワーク力強化

研

修・長野 2024

ワーカーの自己変革と協働する力により
社会を変えていく一歩を目指して

ダイジェスト

令和6年(2024年)

8月29日(木)~31日(土)

会場

JA長野県ビル「アクティホール」(長野市)



令和元年8月に初めて開催し、今回で6年目となった本研修。この間、一貫してソーシャルワークの機能を体系的にとらえながら、ミクロ、メゾ、マクロ領域に働きかけるための知識、方法、技術などを学び、個々のワーカーとしての実践力及び各組織のソーシャルワーク力を高めることを目的としてきました。

この変わらない目的のもと、今回は、受講者自身の自己変革を促し、関係する方々と相互に協働する力を高めるとともに、地域共生社会の実現に向けて組織や地域を変え、さらには社会課題化とその解決に向けた政策等へのアクションを一体的に展開できるソーシャルワークの実践力を身につけることを目指しました。

3日間にわたっての貴重な学びの時間でしたが、本冊子は、特別講演を中心に研修のダイジェストとしてまとめましたのでお読みください。

なお、本研修は、長野県社会福祉協議会が運営する「あんしん未来創造センター」における「学び・研究」として開催しました。

CONTENTS

- 02 研修プログラム
- 03 **【特別講演①】現代社会における生活課題のとらえ方とソーシャルアクション**
ー社会課題化と解決に向けたアプローチー
- 04 **【特別 鼎談】地域住民とともに社会を変えていくために**
ーソーシャルワークへの期待をこめてー
- 05 **【特別講演②】私のソーシャルワーカー論**
ー参加者へ送る勇気とエールー
- 06 **【特別 演習】小さな物語から学ぶライブビネット**
ーケースメソッドで学ぶ地域福祉実践／長野の事例からー
- 08 受講者の事後課題より(抜粋)



主催 社会福祉法人長野県社会福祉協議会



赤い羽根共同募金
配分金助成事業

研修プログラム

1日目 8月29日(木)

オープニングトーク

ソーシャルワークを地域で展開することの意義

—地域を基盤としたソーシャルワークを考える—

上野谷加代子氏 同志社大学 名誉教授

講義・演習1

ソーシャルワークの現在・過去・未来

—他者に学び、歴史に学び、これからを考える—

空閑浩人氏 同志社大学 社会学部 教授

講義・演習2

ソーシャルワーカーが持つ「目に見える力」と「見えない力」

—ソーシャルワーカーのコンピテンシーと自己変革を求めて—

野村裕美氏 同志社大学 社会学部 教授

講義・演習3

気づきを促す主体性の構築

—住民相互の気づきあい—

川島ゆり子氏 日本福祉大学 社会福祉学部 教授



上野谷加代子氏



空閑浩人氏



野村裕美氏



川島ゆり子氏

2日目 8月30日(金)

講義・演習4

地域の組織化と変化・変容

—その理念と手法を考える—

室田信一氏 東京都立大学 人文社会学部 准教授

特別講演①

現代社会における生活課題のとらえ方とソーシャルアクション

—社会課題化と解決に向けたアプローチ—

湯浅 誠氏 社会活動家/東京大学先端科学技術研究センター特任教授/認定NPO法人
全国こども食堂支援センター・むすびえ理事長



室田信一氏



湯浅 誠氏

特別鼎談

地域住民とともに社会を変えていくために

—ソーシャルワークへの期待をこめて—

湯浅 誠氏/井上信宏氏/室田信一氏

講義・演習5

社会保障とソーシャルワークとの関係

—150年後のあんしん社会を地域で創り出すために—

井上信宏氏 信州大学 経法学部 教授



3日目 8月31日(土)

特別講演②・インタビュー

私のソーシャルワーカー論

—参加者へ送る勇気とエール—

勝部麗子氏 豊中市社会福祉協議会事務局長

特別演習

小さな物語から学ぶライブネット

—ケースメソッドで学ぶ地域福祉実践/長野の事例から—

勝部麗子氏/野村裕美氏/室田信一氏

講義・演習6

コミュニティにおける社会福祉の主体形成とネットワーキング

—幸福を生みだす福祉をつくるために—

渡辺晴子氏 神戸女子大学 健康福祉学部 教授

講義・演習7

私たちが目指す協働のあり方

—新たな社会的価値の創造に着目して—

斉藤弥生氏 大阪大学大学院 人間科学研究科 教授

クロージング

ソーシャルワーカーが紡ぐ物語

—一人ひとりの実践があんしん未来を創る—

上野谷加代子氏/斉藤弥生氏



井上信宏氏



勝部麗子氏



渡辺晴子氏



斉藤弥生氏

【特別講演①】

現代社会における生活課題の とらえ方とソーシャルアクション —社会課題化と解決に向けたアプローチ—

湯浅 誠 氏 社会活動家／東京大学先端科学技術研究センター特任教授／認定NPO法人
全国子ども食堂支援センター・むすびえ理事長



急増するホームレスを支援

まずは今回の研修全体のテーマである自己変革についてお話しします。私は1990年代にホームレス支援を始めました。私が路上に通り始めた95年、渋谷のホームレスは100人でしたが、2000年には600人になり、5年で6倍に増えました。街にはホームレスを収容できるキャパシティというものがあり、渋谷の上限は約600人。すでにキャパを超え、誰かが入ってくると誰かが追い出され、いわば水道の蛇口が全開で、路上から人がこぼれ落ちる状態でした。社会の底が抜けているこの大変な状況を、2年間、路上に立って拡声器で訴えましたが立ち止まる人はいませんでした。そこで路上での活動からホームレス支援の自立生活サポートセンター「もやい」を設立し、連帯保証人が不在でアパートが借りられない人のために保証人の提供を始め、結果的に300人ほどの保証人になりました。ほかにホームレスの方の生計の一部とするために、一緒に遺品整理やゴミ屋敷の片付けなど便利屋の仕事も開始。2006年、こうした貧困問題を「格差ではなく貧困の議論を」のタイトルで論文発表したところ、主要メディアから取材されるようになりました。

“6000万人目”に届く言葉を

2009年には政府の要請で内閣府参与に就任しました。約3年務めたなかで痛感したのが、賛同者が増えても約1億2000万人の日本の人口の真ん中あたり、つまり“6000万人目”に届く言葉を持たないと政策は作れないということです。私は活動を広めるために自分が思い付くことは全て形にしてみました。それでも足りないなら、自分が思い付かない発言をする人の意見を聞こうと決めました。そこで異業種交流会などに参加し、そこで出会った方から言われたのが「多くの人に聞く耳を持ってもらうには格好から変えたほうがいい。着たことのない服に袖を通すように、経験したことのないことを経験なさい」ということです。私はそれまで襟の付いた服を10数年間着たことがなく、官邸にも肩から手ぬぐいをかけてサンダル姿で

行っていたので、服装を変えることは簡単なようで難しく抵抗がありました。しかし、この服装の変化が私の自己変革になりました。



服装を変え、ものの見方も変化

服装を変えたあたりから、考え方やものの見方も変わりました。私は以前、とある経済学者から「便所の窓から日本社会を見ている」と言われましたが、便所の窓だけでなく、3階の東側の窓や屋上から社会を見ている人のところに向いて同じ景色を見るようになりました。つまり、相手の目線に合わせることを意識するようになったのです。大学の教壇に立つようになり、ホームレスの方から大学生、大企業の社長、官僚、総理大臣まで、それぞれがどのように世の中を見ているかを学びました。そうした中で“6000万人目”に届く言葉を考え、強く意識してきたのが、政治家や官僚と話す時も相手の目線を理解したうえで、こちらの意見がどう見えるかを考えることです。プロジェクトや事業を立ち上げる際は、いつも与党や野党、メディア、賛同者、反対者など、周囲を10台ほどのテレビカメラに囲まれている状況をイメージします。見え方が違う一つひとつのカメラの視点の獲得が事業化でも政策化でも重要です。

“作る”と“求める”は車の両輪

この数年、給食の無償化を進める自治体が増えました。私が今関わっている子ども食堂の団体で政府に要望書を提出したことはありませんが、間接的に子ども食堂が影響していると思っています。そういう意味では“作る”と“求める”は車の両輪だと感じます。例えば保証人問題の際は、東京都に政策化を訴えても実現せず、民間で取り組もうと連帯保証人の提供を始めたところ、営

利目的の債務保証会社が市場に参入し、現在のようになりました。つまり、政策化ばかりを求めても相手にされないが、事業を作ればかりでは世の中に気付かれない。“作る”と“求める”をうまく縫い合わせるのが事業化です。

ゼロ次予防の子ども食堂

貧困では黄信号と赤信号の人がいます。大半が黄信号です。例えば高齢者の場合、お世話になった方が亡くなり、年金受給日直後なら香典が用意できて葬儀に参列できますが、受給日直前は残高がなく参列できない。すると次第に地域や親戚から孤立します。これが周りに気付かれない黄信号の高齢者です。彼らが認知症を発症するとゴミの出し方がわからなくなり、いつの間にかゴミ屋敷になってしまったりする。私は失業者対策の各種サービスの窓口一本化も普及させましたが、黄信号の人は相談に行きません。問題のある存在だと思われたくないからです。赤信号になった段階で「なぜもっと早く相談に来なかったのか」と言われる状況を長年見てきた私は、黄信号の人たちは公園や地域の祭りなど青信号の人の顔をして行けるところには行くことがわかり、その居場所として始めたのが、子ども食堂支援です。行きたい場所であれば行く必要があるのかという疑問を起こさせません。その中で生活困窮者や虐待児を見つけられることが子ども食堂の機能の強みですが、そのためには「家族事情を探られている」と警戒されない対応が重要です。それがWHOが提唱するゼロ次予防であり、日本で表現される「暮らしているだけで健康になれるまち」づくりです。公園などスティグマ（烙印）が付きにくい場所に面白そうだと出歩く癖がつくと高齢者の健康づくりになり、出会いもある。楽しそうだからやってみる仕組が地域に多く仕掛けられていることが重要であり、その一つが、ホームレス支援の延長線上にある「子ども食堂」です。こういう取組が地域で進み、社会全体に取り残される人が減って、人々が幸せで健康に暮らせるようになることが私の一番の目的であり、ライフワークです。

【特別鼎談】

地域住民とともに 社会を変えていくために —ソーシャルワークへの期待をこめて—

湯浅 誠氏

井上 信宏氏 信州大学経済学部教授

進行役 室田 信一氏 東京都立大学人文社会学部准教授



自己変革の先にある社会の変化

室田: 僕が湯浅さんの特別講演で印象的だったのは「社会で取りこぼされる人が減るための取り組みが自分のライフワーク」とおっしゃったことです。湯浅さんはそうした取り組みをどれぐらいのスパンで行い、どんな世界を描いているのでしょうか。

湯浅: 行けるところまで行ければいいと思っています。自分が生きているうちに完成系をめざしているわけではなく、きっとその先にやってくれる人が出てくるからいいという感じですね。

室田: 自己変革の話も印象的でしたが、行けるといって行くというスタンスだと、常に状況に応じながら変化に対して柔軟に進んでいく感じでしょうか。一般的に変化を起こすにはゴール設定し、ビジョンを描いて取り組みます。

湯浅: 両方かもしれません。こども食堂の団体「むすびえ」で昨年、中期計画を立てましたが、前提にしたのは、生きている人間に対しては計画通りにいかないということです。計画はあくまで現時点の意思をピン留めしたものであり、3か月後には見直す必要があるかもしれない。そのためにピン留め＝中期計画が大事だというイメージでした。

室田: 「ピン留め」や「“作る”と“求める”は車の両輪」など、湯浅さんの言葉の使い方は参考になります。

井上: 僕が湯浅さんの話で気になったのは“6000万人目”に声をかけることですが、どんな活動も2~3人で始めています。どういう形で活動を広げていくのでしょうか。

湯浅: ずっとやりたいことを言い続けていると仲間を見つけられます。民間の事業はそうやって仲間が集まって内側から広がっていきます。そうした中で“6000万人目”に言葉が届いたら多くの人の感覚とシンクロできると考えました。

室田: ちなみに井上先生は自己変革をどう自分の中に取り入れているのでしょうか。

井上: 僕は学生時代は経済学を勉強し、福祉は少しも考えたことがありませんでした。専門

は社会保障で、研究を始めた80~90年代は年金と介護保険の金勘定ばかり考えていました。しかし社会学のツールとして地域の様々な人の話をヒアリングすると、現場の姿と政策で語られる福祉の姿は違うと気づき、福祉に向き合うようになりました。僕は湯浅さんとは逆にネクタイをして社会調査していましたが、ある時に地域の方から「査察が入っているみたいだ」と言われて服装を変えました(笑)。

室田: 僕の自己変革のエピソードも少し話します。僕は留学で渡米し、帰国後はNPOに関わって仲間を見つけ、コーチングを受けながら地域活動を推進していく人を組織化する活動に取り組みましたが、うまくいかないですね。散々挫折の経験を積み、湯浅さんの話にあったように、いかに他者の目線に立つことが重要かトレーニングを受けたことが自己変革のきっかけです。

井上: 自己変革をどうやって自分の中に入れられるかはすごく大事です。湯浅さんの洋服の転換のように、自分を変える機会は皆さんの中にもあって、そこに気付けるかが重要です。

湯浅: 私の自己変革は底つき感があったんです。このままではダメで何をしたいかわからず、藁にもすがる思いだったから自己変革を飲み込めたと思っています。もちろん洋服は一つの象徴ですけどね。

他者と目線を合わせてめざす社会

湯浅: 私の今後の構想は、地域の居場所をデザインできるようになることです。ターゲット型の居場所もオープン型の居場所も大事で、例えばスマホで検索すると、行政施設か民間施設か関係なく地域の中で自分の居場所が出てくるイメージです。そういう取り組みを始める自治体が出てきたらいいと思っています。

井上: 僕が地域の中で欲しいのは、食事を一緒に作ったり食べたりできる空間です。料理を作るのは楽しいし、作ると誰かに食べてほしくなる。そういう人のつながりがあるのがいいと思っています。

室田: 実は僕は帰国時に「1億総オーガナイザー計画」という研究計画を立てました。ま

ちの中に雇用者からボランティアまでさまざまなオーガナイザーがいて、何か活動を始めるときに背中を押してくれたり仲間を呼びかけてくれる人が増えるイメージです。身近な存在のオーガナイザーが社会に2000万人くらいいたら随分生きやすいと思っています。

最後に湯浅さんにお聞きしたいのは、“6000万人目”に伝えることで期待する大きな変化と、湯浅さんのアプローチである草の根的な活動の結び付きです。

湯浅: 私は大きな変化と草の根活動は区別しておらず、それを生み出す土壌が大事だと思っています。“6000万人目”というと大掛かりに聞こえるかもしれませんが、例えばこども食堂をやりたい人も、こども食堂を「日常の食事ができない子が来る場所」だと思っている人も世の中にはたくさんいますので、行政などの後ろ盾を得て地域全域で進めていくためには、やはり“6000万人目”に届くように語りかけ、どちらの目線も持ったプレゼンが重要です。

井上: それこそが今一番大切だと思います。というのも、フューチャー・デザインは元々、社会システムをどうデザインするかという経済学の考え方の中から生まれたものです。僕らは日常生活で、資本主義や民主主義などいろいろな社会システムにがんじがらめで、それを変える一つの方法がフューチャー・デザインですが、社会システムの変化とあわせて自己変革が行われない限り、目の前の変化が持続できません。福祉や地域の中で住民と一緒にフューチャー・デザインを考え、関わってくれた人のマインドがどう変わるかに軸を置き、それを投票行動につなげることで、ようやく社会システムが変わるのではないかと、僕はそれをアプローチとして考えていこうと思っています。

室田: 今日の対談で私自身は、社会の変化は自己変革と一緒に考えなくてはいけないことを、まさに日本社会を変えることに突き進んできた湯浅さんから学び、井上先生の話でフューチャー・デザインと結び付けて考えることができました。皆さんの実践にもお役に立ったらうれしいです。

【特別講演②・インタビュー】 私のソーシャルワーカー論 —参加者へ送る勇気とエール—

勝部 麗子 氏 豊中市社会福祉協議会事務局長

住民と一緒に福祉をつくる

私は大学時代は教員志望でしたが、教育実習で毎日遅刻してくる子から「朝まで働いている母の帰りを待ってから寝るので起きられない」との話を聞き、こういう世帯を支えていく仕事をしたいと、生まれ育った豊中市社協に入りました。入職当初、一人ひとりの相談に向き合っていると、上司から「40万人も住民がいるのにどうするんだ」と言われましたが「100人困っている人がいたら100人も向き合うように頑張ります」と答えていました。こうして30年間の間で築いてきた住民との関係性により、今では地域をよくするための取組を住民と一緒に考えながら進め、地域の困りごとは社協に相談するという流れができています。コロナ禍では、早朝のラジオ体操がきっかけで民生委員の方から路上生活者が増えているという相談があり、朝4時、公園に行くと37人の人と出会いました。地域の人たちは、こういう問題も社協に相談すれば受け止めてくれるという関係が作れています。

住民主体の地域活動

豊中市は人口40万人で、高度経済成長期に大阪市から多く移住し、通勤族も多く、年間2万人ほどが入替わりします。自治会組織率は4割を切っていることから、小学校区単位で「校区福祉委員会」という地域住民の自主ボランティア組織を作り、地道にボランティアを増やしてきました。先日は社協に勉強に訪れた高校生たちに「スマホが操作できず困っている高齢者が多い」と話すと、彼らがスマホの講習会を開いてくれることになり、ボランティア登録をしてくれました。現在は市全体で1万人ほどのボランティアが登録しています。最近ではLINEでボランティア募集をしているほか、全戸配布のポスティングでニーズとシーズのアンケートを取っています。ポスティング作業はひきこもりの人たちの就労として依頼し、コンビニや郵便局などに設置したボックスで回収。回収率は

高くないものの、1回のアンケートで各小学校区15～50人ほどのボランティア希望者が見つかります。地域の人たちには、ボランティアは誰かを助けるのではなく、福祉などを相談できる社協とつながったと思ってほしいと伝えています。

定年退職後の男性の居場所づくり

定年退職の男性の孤立も増えていることから、現在、市内9カ所、計600坪の土地を無償で借り、野菜作りをしながら地域づくりの担い手をつくる取組「豊中あぐり」も展開しています。会員は180人ほどになりました。海外赴任をしていた会員も多いことから、最近では市内に増えてきた外国人の生活相談や子どもたちの学習支援でも活躍してもらっています。支援する人をつくると言うとき重く捉われがちですが、まちづくりに関わると言うとき生きがいや楽しみになります。つながら工夫により、福祉がまちづくりにつながっていきます。

得意なことを生かした参加支援

豊中市社協では、本人の力を引き出してその人らしい人生を送れるような相談支援に取り組み、絵が得意な障がい者やひきこもりの人のためにアート展を開催したり、漫画が得意な人には漫画を制作してもらったりもしています。中学時代から7年間社会に出られなかった若者の家庭を訪問した際、珍しいメダカを繁殖させていることを知りました。そのメダカの話しを聞くと会話ができ、こちらからの話しにも応じてくれるようになり、社会に出ていけるようになりました。その彼は現在、プログラミングの会社の社長になっています。誰とどこでどう出会うかによって、人は変わると感じています。

また、先日はピアノが得意な高機能自閉症の子どもに高齢者施設で演奏してもらいました。一人ひとりの幸福追求を考えていく時に、すべての人に居場所や役割をつくっていくことがこれからもっと求められていきます。得意分野を入口にしてサポートしていくと、皆が地域で輝



いていけると感じています。

ほかに、ひきこもりの人の中には高学歴の人もいるので、不登校の子どもたちの学習支援をしてもらっています。得意なことで協力してもらい、Win-Winの関係を楽しんでいます。

重層的支援で排除ではなく包摂を

地域には自分でSOSを出せない人も多いことから、地域包括支援センター職員とコミュニティソーシャルワーカー(CSW)とボランティアがローラー作戦で全世帯を訪問し、支援が必要な人や制度の狭間で苦しむ人を発見しています。その中で、ひきこもりや8050問題、外国人の孤立など、様々な問題を抱える人が発見されることから、CSWと行政の関連部局などが課題を共有する地域福祉ネットワーク会議を設け、ライフセーフティネットの仕組みをつくってきた流れが、現在の重層的支援体制整備事業の原型になっています。誰一人取り残さない地域共生社会の実現に向け、支援の必要な人が最終的に地域に戻って地域で支えていくような仕組みをつくらないといけません。排除ではなく包摂として、どうやって地域で受け入れながら暮らしていくか、また支えられていた人が支える側になるか。社会の弱い部分を支えていくためには地域住民と協働するCSWの存在が大切で、制度の狭間の個の課題を一緒に考える住民を増やしていくこともCSWの大きな役割です。そのうえで、これまで福祉は課題解決支援ばかりを考えてきましたが、これからはすべての人に居場所と役割を与える参加支援が大切だと感じています。

CSWは、人や地域の変化に立ち会える素晴らしい仕事です。CSWの活動によって地域の人たちの関心も変わる分、しっかりと住民に地域のことを伝えていかないといけません。人は知ることによって優しくなれますが、どうやって伝えていくか。CSWの仕事は傾聴も大切ですが、情報発信も重要だと思いつながりながら活動をしています。

【特別演習】

小さな物語から学ぶライブビネット

—ケースメソッドで学ぶ地域福祉実践／長野の事例から—

勝部 麗子氏／野村 裕美氏／室田 信一氏

感情リテラシーを高める

特別演習では、実際に起こった事例をもとに参加者全員で語り合う、ケースメソッドという討議法を行いました。これは、「ビネット」（小さな物語）に登場する主人公になったつもりで考え、議論するものです。物語の世界に入りこみ、疑似体験する経験の中から自分の学びを見つけ、仲間との討議で思い切って発言したり、意見に耳を傾けることで、学びの共同体が築かれることを目指します。

演習の冒頭、野村先生からは「ソーシャルワーカーは自分の知識やスキルを豊かにしながら自分を鍛えつつ、辛さや悲しみなどいろいろな感情を持ってクライアントとの関係を作っています。この感情は自分のベースになっている価値や所属する組織などで異なり、それをコントロールすることが、ソーシャルワーカーとしてのより良い判断につながっていきます。過去のクライアントとの出会いや同じ環境にある仲間との親和性もソーシャルワーカーとしてのやる気につながります。感情との関係性を理解し、感情リテラシーを高めることで自分をコントロールできるソーシャルワーカーに近づくのです。答えを出すのではなく、自分の知識や技術を生かし「私だったらどうだろう」という枕言葉を必ず頭につけて話すことが大切なルールです。自分が良いと思った意見は職場に持って帰ってください」と、ビネットで学ぶことについての話がありました。

“私だったら”どうするか

今回は、アルコール依存症で近所との

トラブルが絶えない、ゴミ屋敷に一人で暮らす離婚歴のある50代男性の物語です。「もし、私がこの方の支援担当になったら？」という問いに対し受講者からは、「最初は恐怖感が出て、繰り返し訪問してもなかなか変わらないことにうんざりしそう」、「自分の幼少期、父親が酒を飲むと性格が豹変していたので、クライアントと父親を重ね、昔を思い出して悩むと思います」などの発言がありました。

野村先生からは、「私も医療の現場で勤務していた頃、アルコール依存症の患者さんを担当し、私の心ない説明に『お前はどこを見ているんだ』と怒鳴られた経験があります。その時は陰性感情が浮かびましたが、その後も患者さんとの関係が続いていきました。こういう気持ちを皆さんも職場で同じ立場の人たちと共有してください」と語られ、仲間と陰性感情を共有することも必要なことだと気づかせてくれました。

次に、「この事例で何を大切にしたいか、自分の感情とあわせて話してください」との問いが投げかけられました。「支援をやめないでほしいと言った本人の気持ちを尊重し、その背景にどんな感情が隠れているかを考え、支援を継続していくことを大切にしたい」「お酒をやめられた事実をもう一度一緒に確認し、今後は当事者グループへの参加で自分の経験を話してもらうなど他の人の支援につながる側になる提案をしつつ、本人に寄り添う支援を続けたい」という意見が出され、会場全体で共有することができました。



お互いが教え合うコミュニティ

勝部麗子さんも、「この方にも、キラキラしていた人生があったはずなので、もう1回人生と一緒に考えていきたい。力を貸してもらおうという形での関わりでつながり続けたい」と本人の強みを活かし、つながり先を増やし、孤立させないように関わり、何とかしてあげるといっではなく、私を助けて欲しいというスタンスで関係を築く大切さについてお話しいただきました。

室田先生からは、「自暴自棄で自分を大切にできなかった時間があったと思うので、まずは自身を大切にすることを重視し、自尊心を回復させたい。そのためには向き合うワーカーの覚悟も必要ですね」とクライアントの過去も未来も大切にする向き合い方、心構えを伝えていただきました。

ビネットを提供した受講者は、「なぜ感謝されないのだろうという気持ちはずっと持っていました。皆さんの話を聞き、支援者とクライアントという関わり方ではなく目線を合わせた状態で関わり続けることが大切だと気づきました」と支援を見直す視点を手に入れていました。自由な討議で他のソーシャルワ



カーの多様な価値観に触れ、自分が当たり前だと思っていた支援を振り返ってみる場になったようです。

また、勝部さんは、「私がアルコール依存の人と関わった事例では、何度も裏切られ、うまくいかないことの繰り返しでしたが、人生を諦めかけている人たちを目の前に、支援を止めることはできないと感じていました。本人の人間関係が広がらないと、支援が終了したことで再び飲酒が始まることも十分考えられます。『専門職だからこうやるべき』ということではないと改めて気がつきました」と話され、室田先生も「ソーシャルワーカーの専門性を標準化して他のワーカーが担当になって同じように関わることが求められることがあります。今回の事例はそうではないことを示してくれました。当たり前の人間関係を築く覚悟を持って、クライアントの自尊心を取り戻すことに正面から向き合うことは簡単ではありませんが、ある意味で普遍的な専門性でもあると思いました」と述べられ、専門性とは何かを改めて考え、ソーシャルワーカーとして日々のクライアントとともに学んでいくことの重要性を学ぶ場となりました。

「直接教えない講師」「参加者による議論」「協同的な態度」が講師の先生方のディスカッションリードにより促進され、教科書に載っていない現実的な発言や知恵、経験が語られる場はとても刺激

がありました。“私だったら”というように、相手の立場に立つという経験をすることで視野が広がり、お互いが教え合う

ような関係によって、会場全体で学ぶことができたライブビネット演習でした。



ビネット学習の進め方(参考)

1) ビネットを書く

- ①「私」は地域のどこにいるのか(ポジショニング)
 - ②誰が事例を発見し、「私」につないだのか(発見)
 - ③事例概要(どのように・どこで・誰と・「私」は出会ったのか、一体どんな相談であったのか、相談にくるきっかけがあったのか、この事例はどうなったのか等)
 - ④「私」がこの事例を選んだ理由
- ※以上の①～④をB5かA4用紙1枚以内で作成する。

2) ビネットにタイトルをつける

この事例を一行でまとめると、どのようなタイトル(テーマ)をつけることができるかを考える。研修では、参加者全員がタイトルを隠したビネットを読み合い、タイトルをつけ、自分がつけたタイトルと読み手がつけたタイトルとの異同を共有したりする。

3) ビネットを読む

仲間がどのような事例に直面し(問ステップ①～③)、どんな風に奮闘しているのか(同④)を知ることができる。

4) ビネットを素材に仲間と討議する

事例を知ることで生まれる仲間への共感、通りすがりではられない「なんとかしたい」という行動への動機となり、一緒に考える仲間がいることで逃げずに考え続ける粘り強さへとつながるだろう。「もし私がこのような場面に遭遇したらどうとらえ、どう対処するかを考え、最終的にはどの方法を選ぶか」という仲間のさまざまな意見やアイデアに触れることで、考え方や対処のバリエーションが増えることとなる。

上野谷加代子/勝部麗子/野村裕美「地域福祉コーディネーターのためのビネットで学ぶ地域福祉実践」(2018年)より



受講者の事後課題より(抜粋)

なぜコソ研は面白いと感じるのか。それは、哲学的な学びがとて多く含まれているからだと思いました。私たちソーシャルワーカーは、生きるとはどういうことか、人の幸せとは何かと常に問いながら誰かの人生に向き合っているように思います。相手の感情に振り回されたり、自分の感情を抑えられなかったり、私はそんな弱い人間ですが、でもコソ研はそんな弱い自分に真理を思い出させてくれ、教えてくれる場所だと思いました。

固定概念にとらわれず広い視野で物事を考えることの大切さ、また自分が、今までしてきた対応を思い返し見つめ直すことができた研修となりました。支援に行き詰まったときは、一度踏み止まり、本研修で学んだことを思い返すようにしようと思います。

自分の考え方を変える「自己変革」という研修のサブタイトルにぴったりな研修だった。

ソーシャルワーカーとして持つべき基本的な心構え、それを持ちながら地域につながっていくことを学べた研修だと思えます。

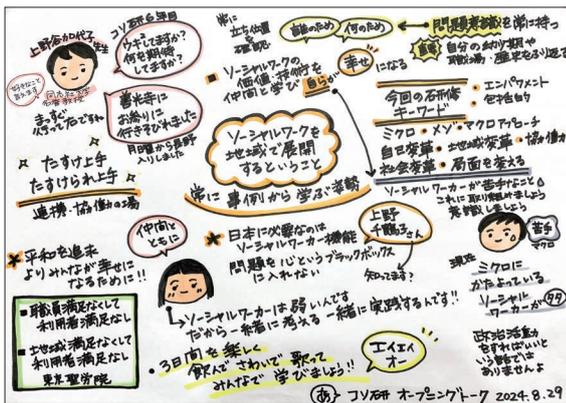
ソーシャルワークの知識、方法、技術について学習できる貴重な時間でした。この研修に参加させていただくと、ソーシャルワーカーとして頑張りたいという思いを新たにします。

支援を必要とする方のためにソーシャルワーカーがどこまで気づき、動けるのか、そのために誰とつながり、受け止め、気づきのかげらを集めていくのか。支援を必要とする方の場所に立つことを意識していきたい。

自分が一番求めていた内容の研修でした。本当にどの講義・演習も最高でした。

地域や立場は違えども似た志を持つ様々な方々と一緒に学習ができたことは非常に大きな経験、収穫でした。

自分一人では閉塞感や八方塞がりの感覚を抱いてしまうようなこともあるが、多くの人と考え方を共有し、様々な意見を交わし合うことで、肩の荷が軽くなるような感覚を覚える場面が何度もあった。



オープニングトーク「ソーシャルワークを地域で展開することの意義ー地域を基盤としたソーシャルワークを考えるー」より



講義・演習1「ソーシャルワークの現在・過去・未来ー他者に学び、歴史に学び、これからの考えるー」より

Special Thanks
協力

一般社団法人 日本ソーシャルワーク教育学校連盟



社会福祉法人 長野県共同募金会

公益社団法人 長野県社会福祉士会

長野県社会福祉法人経営者協議会

令和7年度 コソ研・長野2025 開催のお知らせ

開催日 令和7年 8月28日(木)~30日(土) 予定

会場 深志神社梅風閣 (松本市)